

# 手技に学ぶ—京都の伝統産業の現場から—展 これからのものづくりと大学の役割

京都精華大学 デザイン学部 教授 佐藤 敬二

京都精華大学では、1980年以来28年にわたり、京都の伝統工芸や産業の工房で伝統文化や技術について学ぶ「学外実習」を行ってきた。この「学外実習」は本学芸術学部の3年次、夏期の約2週間、伝統産業の工房・企業に通って直接指導を受けながら、制作過程の様々な実務を経験する。実習前には、各実習先の担当教員によるゼミ形式の事前授業を受ける。これまで実習先の工房・企業は39を数え、実習を経験した学生は1360名を超える。

この背景には伝統的な「ものづくり」の精神や文化と技を若い学生達が学ぶ事によって、現代の生活に根ざした創造性を育んでもらいたいとの考えがある。現場で制作を体験した学生からは、工房・企業の仕事の水準の高さに驚き、大学では味わえない体験が出来たとの感想が聞かれる。実際この実習がきっかけとなって伝統工芸・産業従事者になる者もあり、現在多数の卒業生が伝統産業関連の工房や企業に就職している。

本学では、この教育現場における取組と、ご協力いただいた工房の歴史や、伝統的ものづくりの精神を一般にも広く知っていただくために、2008年3月23日(日)から30日(日)まで、京都文化博物館にて展示を行った。30の工房や講師から作品91点、資料99点、学生52名の作品約57点、報告書57冊、その他学校所蔵資料13点、合計300点を超える展示物を約1500名の来場者に見てもらった。その展示会の開催報告とともに大学の役割について考えたい。



## 伝統工芸・産業の特質と展示

伝統工芸の作品や伝統産業の製品には、完成までに品質の良い自然素材とそれらの特性を生かした加工をする多くの工程があり、伝統に根ざした匠と文化性の有るメッセージを込めた形を表現するため、多彩な道具が必要となり、多くの人手を経る事になる。

今回の展示会では京都の伝統工芸・産業に携わる工房や企業である実習先の代表的な作品・製品以外に、その歴史や技術の特色、ものづくりの現場・仕事場の雰囲気を感じ取れるよう、製作工程・素材・加工道具なども展示し、併せて、学外実習で指導を受けた学生のフレッシュな作品や実習成果の報告から伝統工芸・産業の現場で学んだ生き生きとした情報が伝えられるよう、作品や現場での取組、工程・材料やデザインの課題の報告集など、様々な切り口で展示を行った。また、座学である「京都の伝統美術工芸講座」の講師の先生方にも協力いただき、その素晴らしい作品も展示させていただくことが出来た。

## 伝統工芸・産業の課題

伝統工芸・産業のものづくりの課題として、良質な自然素材の入手が困難、加工する道具づくりのための良質な素材(鋼など)の減少、また、流通や消費の問題として、伝統的工芸品を活かせる生活空間が少ない、卓越した職人技を振るうべき場が無い、後継者の育成が難しい、など多くがあ

げられる。

そういった中であって、実習先の工房・企業からは、ものづくりの姿勢として、先人の知恵と自然の英知を謙虚に学ぶこと、技を絶えさせないこと、貴重な自然素材の持つ良さが使う人に伝わるよう努力すること、コンピュータでは為すことの出来ない「手で考える」事を大切にすることなど様々な「手わざ」への思いをうかがい知ることが出来た。そのような現場で実習を行うことにより、学生はものづくりの心、すなわち使う人への気遣いや次の工程を担う人への心遣い、使う道具や環境への気遣い、そして、ものづくりのデザイン感覚や手の感覚、身体感覚、生きている自然素材の大切さ、時代や世代間を超えた人と人の繋がり、などを学んだことと思う。それらは伝統の良さを知ったうえで、現代生活に合った最高のものづくりへの飽くなき探求や挑戦をし、歴史的な長い視野をもって新しいデザイン・技・造形・文化の創造に取り組むという、今後の生活文化のあり方や伝統産業の可能性、方向性を見出す機会になったと思う。

## 伝統工芸・産業の役割

伝統産業を受け継いでいくことは、文化や風習、技術、意匠を保存するのみならず、産業としてまた作家としていかに継承発展できるかということである。生活者のライフスタイルが多様化する中で市場の開拓、消費者の育成、生活文化や伝統的価値観、本物を長く使うことの良さを啓蒙

する必要があるが、次の代に何を引き継いでいくべきかを考えなければならない。

### 近代におけるデザイン改革の努力

現代のライフスタイルに合った作品や製品づくりのためには、東京遷都による京都の工芸業界の危機を乗り切った、近代の人々の努力にその方向性を見出すことができる。装飾的な工芸デザインを得意とし、琳派の再来といわれた図案家の神坂雪佳や、アールヌーボーを日本に紹介しつつも琳派に回帰した、画家であり工芸図案家の浅井忠たちは、洋風インテリアにも調和する和のデザインを残した。雪佳は佳都美会・京都美工学院、京都美術協会等で、浅井は遊陶園や京漆園、関西美術院など業界・工芸家の研究団体を創り指導を行った。彼らはユーザーに合わせたデザイン、製作者の決定、価格や販路の検討まで行い、業界や作家にデザイン改革の必要性を訴えた。

また、建築家の藤井厚二は洋風住宅の機能性と和の暮らしの接点を追求し、大山崎の山麓に実験住宅を建て自ら暮

らし、学生や建設業界の技術者達と住宅環境・設計の研究を行った環境工学やユニバーサルデザインの魁であった。彼らは何れもそのものづくりにおいて、伝統的技術を持った作り手に可能な限りの技術・技能を要求した。また、彼らはそれぞれ京都市美術工芸学校、京都高等工芸学校、京都帝国大学など高等教育機関で教鞭をとりつつ、産業界とともに新しい時代を切り開いた、産学連携事業のパイオニアであり、ものづくりの指導者であった。

### 生活文化の創生とデザイン近代化

今日、大量生産、大量消費によるデザインの均一化の弊害や東京集中のデザイン志向を反省し、地域のデザイナーによる地域のためのデザイン、また、技術や素材の特性を良く知ったデザイナーや工芸作家の育成、地球環境に優しいものづくりなどが痛感される。工房にも手技の現場から生活提案の必要なことを理解し、自ら新しいものを創りだし、生活者に提案し、伝統産業の可能性にチャレンジする機会を持っていただくことが必要だと思われる。



### ものづくりの課題と大学の役割

大学が成し得る仕事として、まず若い人たちに伝統産業への入り口を開くこと。そして職人や工房・企業、学生諸君と指導者が一緒に京都の生活文化を創っていくこと。学外実習を契機としてそれらの人々、デザイナー、生活者、行政、識者が一堂に会し現実的な事が話せる機会を設けること。京都の生活文化や工芸を、ものづくり、まちづくりの実践に基づき、正しく伝えることの出来る指導者を育成すること。新しい産学公連携を考え、他の地域との連携や他産地との連携、他大学との大学間連携も含め行政に産業振興の施策を提案してゆくこと。など多くの課題が有るように思われる。

今後、大学がデザインと芸術を切り口に、伝統工芸の作品作りや伝統産業研究の場、ものづくり教育実践の場、伝統産業から近代産業に至るまで生活文化を創造する場として社会に貢献できればと思う。また、教育プログラムを通して地域文化を理解してゆく「学びの姿勢」を大切にしながら、地域社会への還元として、業界や行政に施策提言など大学だからこそ出来る役割を果たしていければと思う。工房に、企業に、市民に、そして学生に開かれた大学でありたいものである。

### 参考〈展示出品協力企業〉

植治 小川治兵衛(京造園)、松榮堂(お香)、岡墨光堂(京表具・文化財修理)、竹中浩工房(陶磁器:京焼・清水焼)、澤村陶哉工房(陶磁器:京焼・清水焼)、清水人形・高橋毅子(京陶人形)、竹美斎・石田正一(竹工芸:編組)、川人象嵌(京象嵌)、伊藤裕司漆芸アトリエ(漆工芸:京漆器)、好謙漆工房(漆工芸:京漆器)、千總(京友禅)、栗山工房(型染:紅型)、細見綴織工房(綴織)、川島織物セルコン(織物)、藤三郎紐(組紐)、染司よしおか(染色)、岩野平三郎製紙所(和紙)、山喜製紙所(和紙)、唐長(唐紙:京唐紙)、雅堂(京版画)、佐藤木版画工房(京版画)、森本鋳金具製作所(金属工芸:鋳金具)、宮崎木材工業(京指物)、さわの道玄(文化財修復)

### 〈京都の伝統美術工芸講座講師出品〉

大西清右衛門(茶の湯釜)、山口富蔵(京菓子)、田畑喜八(京友禅)、面屋庄甫(京人形)、江里康慧(仏像)、江里佐代子(きり金)

#### 講師プロフィール

佐藤 敬二 (さとう けいじ)

京都精華大学 デザイン学部 教授

略歴 1948年、京都府生まれ。京都市立芸術大卒。専門はプロダクトデザイン、工芸・デザイン史、伝統産業論。京都市産業技術研究所部長を経て、平成18年4月から現職。

【お問い合わせ先】

京都府中小企業技術センター  
企画連携課 情報・デザイン担当

TEL:075-315-9506 FAX:075-315-9497

E-mail:design@mtc.pref.kyoto.lg.jp